

令和7年度 羽島市学校医園医部会テーマ

がん教育と命の大切さについて

～ 生活習慣による命を脅かす病気やがんを学ぶ ～

1 主題設定の理由

平成24年にがん対策推進基本計画が閣議決定され、がんの教育・普及啓発を個別目標として示され、健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理し、「がん」に対する正しい知識とがん患者に対する正しい認識を持つよう教育することが示された。岐阜県教育委員会では平成30年度より「がん教育」を推進され、令和5年発刊の「学校におけるがん教育の手引き」を参考に、羽島市でも令和5年度より学校医によるがん教育を推進している。

日本人の死因の第1位は「がん」であり、2人に1人が罹患し、3人に1人が死亡する国民病と言われている。しかし、現在は、がんは命を脅かす厄介な病気であるが、その発生原因や進行の状況について遺伝子レベルまで解明されようとしている。「がん」は遺伝子の異常が受け継がれて発症するものもあるが、生活習慣や感染症によって遺伝子が傷ついて発がんするものも多い。「がん」の発症リスクのうち生活習慣(喫煙、食生活、運動、感染症対策など)に関するものは予防が可能である。若い世代から正しい知識をもち、生活習慣に潜む疾病や「がん」を医学的・専門的に学ぶことを通して生活習慣改善の力を育み、自らの命を守ることを実践できる子どもに育てていきたいと考え、取り組みを進めている。

2 研究仮説

- (1) 「がん教育」については学ぶ側も教える側もハードルが高い。そのため文部科学省によるスライド教材モジュール等が用意されており、「がん教育」を進める前段として、『日本対がん協会』が作成した『まんが みんなのがん読本』を読むことを通して、「がん」への理解が深まる。
- (2) 担当教諭や養護教諭による保健学習。また、学校医やがん経験者からの講話等を学校の教育課程に組み込み、計画的に「がん」についての学習(授業)を行うことで、生徒だけでなく、教職員や保護者にも周知することによって、幅広く「がん」に対する知見を広めることができる。

3 研究内容

- (1) 中学校第2学年を中心に「がん教育」の授業を実施。学校医の講話や意見交流を行う他に、学校医が生徒や担当教師の話し合いを見守りながら、随時、質問に答える。
- (2) 「がん教育」を進めるにあたり、授業前-マンガ読書・保健体育授業後-学校医による講話後の3回アンケートを取って、生徒の意識の変容や知識などを分析し、実態把握と今後の方向性を見定め、よりよい「がん教育」の推進に取り組む。

4 研究実践

- (1) 中学校第2学年を中心に「がん教育」の授業を実施。学校医の講話や意見交流を行う他に、学校医が生徒や担当教師の話し合いを見守りながら、随時、質問に答える。

① 導入

- (ア) アンケート結果の確認と感想交流

- (イ) 感想の中からピックアップしておきたい事項について資料を提示
- (ウ) 課題づくり (提示)

② 展開

- (ア) 課題解決のための見通しを確認する
- (イ) 班ごとに調べ学習を行う
- (ウ) 各グループの発表

③ まとめ (講話)

〈まんが みんなのがんの読本〉

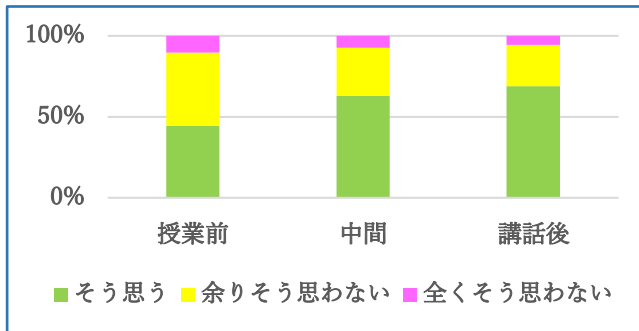


〈授業・講話の様子 — グループ討議・がん経験者・学校医・保健体育教諭〉

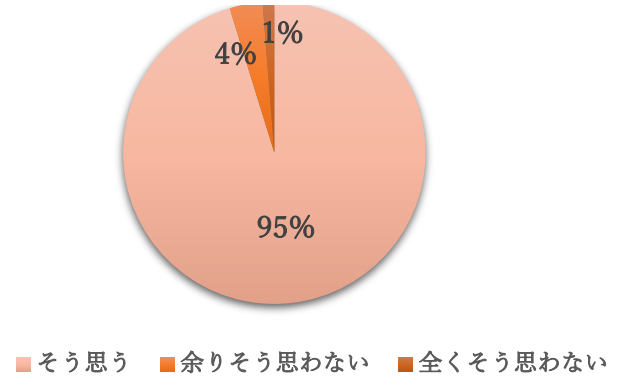


(2) 「がん教育」を進めるにあたり、授業前—マンガ読書・保健体育授業後—学校医による講話後の3回アンケートを取って、生徒の意識の変容や知識などを分析し、実態把握と今後の方向性を見定め、よりよい「がん教育」の推進に取り組む。

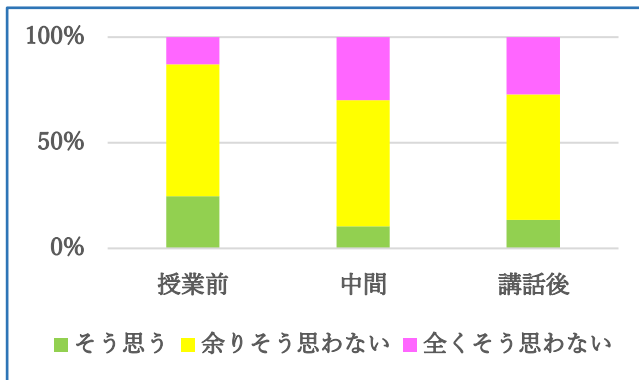
Q 2. 自分は将来「がん」になる可能性はあると思う



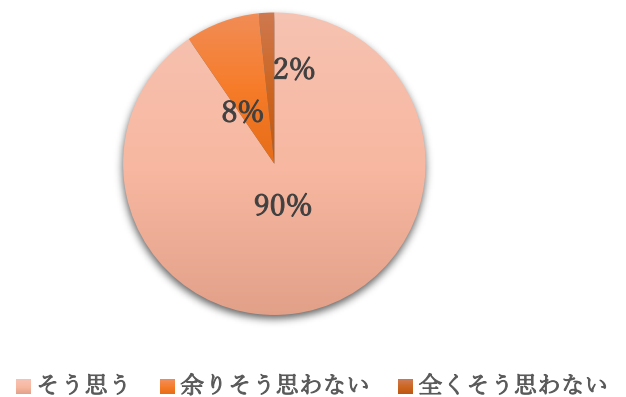
Q. 今日の学習は、これからのあなたの生活に役立つと思えましたか



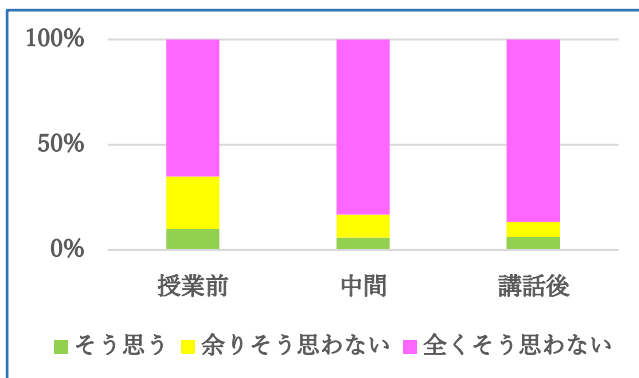
Q 5. 「がん」になったら治らない



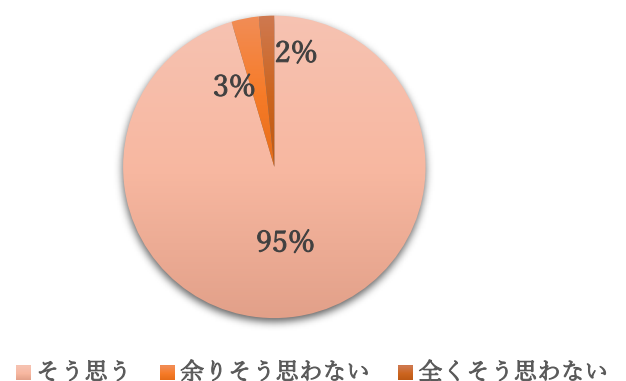
Q. 自分も大人になったら、がん検診を受けようと思う



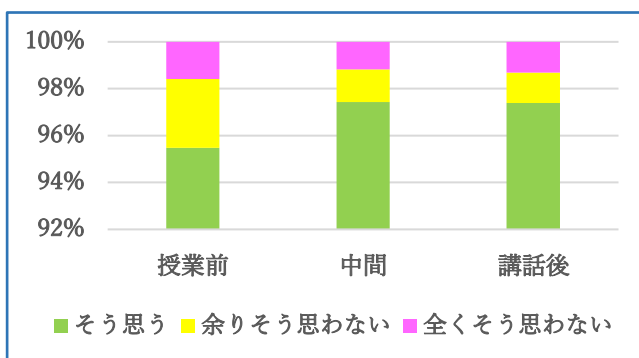
Q 1 4. 喫煙と「がん」の発症に関係はない



Q. 命の大切さを考えることができましたか



Q 1 5. 「がん」の発症には生活習慣も関係する



〈生徒の感想（自由記述）〉

○「がん」は怖い病気だとずっと思っていたのですが、そうではなくて、治ることも予防することもできる病気だと分かりました。正しい知識は必要だと思いました。

- わかりやすかったし、「がん」はどんな病気で、どんなことが欠けていたらなったりするのかが分かった。
- 「がん」は、やっぱり遅めに発見すると治療が難しく死に繋がる可能性が大きくなるから、定期的に検診して「がん」を防ごうと思います。
- まず「がん」にならないためには、適度な運動、バランスの食事、禁煙などして「がん」にならないようにします。
- 将来、自分もなる可能性もあるので、自分事として話を聞いたり調べたりすることができました。「がん」に様々な種類があり、どう予防していくのが良いのか等も保健の授業の授業内容を思い出したりしながら、学ぶことができました。
- 将来に活かせるようなことを学んだ。
- 「がん」を早期発見すれば、治すことができる。 等々、多数。

5 成果と課題

(1) 成果

- 各学校とも、「がん教育」の授業で活発な意見交換があった。その中で、生活習慣に対する注意点や健康診断の必要性等を考えることができ、授業実施の効果を実感できた。
 - ・正しい知識を得ることが偏見や恐怖心を払拭し、予防などについて日頃の生活習慣に反映できる意識啓発につながった。また、改めて命の大切さを痛感していた。
 - ・身近な家族の健康状態などに改めて関心をもつことになり、健康に関することや、がん検診などについて、家族で話題にする等、考えるきっかけを作ることができた。
- 市内の学校医、小中学校管理職、養護教諭、保健関係教諭等を中心として、「がん教育」推進の意識が高まり、その取り扱いを検討していく過程を通して、羽島市学校保健会活動における協働連携を強化することに繋がった。

(2) 課題

- A中学校では、がん経験者さんからのご講演もあり、学びの多いものとなった。今後も、学習内容を十分に精査した上で、学校医を中心として、関係諸機関やがん経験者等の外部講師との連携した取り組みを進めることが重要である。
- 「がん教育」を進める中でアンケートを3回実施した結果、マンガ読書の効果は期待していた程ではなかった。マンガ読書とその後の授業内容と重複する点が多くなった事を踏まえ、『まんが みんなのがん読本』の効果的扱いについて検討する必要がある。
- 授業で取り扱う際には、生徒の「がん」に関わる家族状況等について可能な限り把握した上で、提示内容や言葉遣いについて十分に配慮する構えが大切である。
- 今回の取り組みでは、取り扱う内容を考慮して受講対象を中学校第2学年を中心としたが、「がん検診」の受診率が低いことが懸念されている現況を鑑み、親子で取り組めるような実践も望ましいと考える。保護者を含めて「がん」における正しい知識や考え方を習得すると共に、がん検診の受診率の向上にも繋がるように、学校医やPTAとも連携して進めていく体制づくりも必要である。
- 「がん教育」を進めるにあたって、「子宮頸がんワクチン（HPV ワクチン）接種」の啓発の取り扱いについては、更に保健機関や行政機関とも連携していく必要がある。